

我がくも膜下出血の記

堀添 智(3組)



私は二〇一〇年七月六日昼頃(推定)くも膜下出血を発症しましたが、幸いにも軽症で、目立った後遺症もなく軽快、年末には普通に社会生活を送れるようになりました。

くも膜下出血の典型的な症状は、強烈な頭痛、意識の混濁と嘔吐です。ところが最近、軽症の患者の報道があります。たとえば、発症から何日も経ってから、患者が歩いて病院に来た、といった例です。もちろん、私は、この軽症の例です。

軽症はもちろん幸いなことですが、手放して喜べる状況ではありません。くも膜下出血は脳内の動脈瘤が破裂することで起こりますが、破裂候補は一動脈瘤ではないのです。軽症は、最初の動脈瘤破裂が軽症であったただけのことで、二発目、三発目があったら一巻の終わりです。

くも膜下出血の最大のリスク要因は年齢です。既にわれわれはその年齢に達しています。くも膜下出血になり、幸いにもそれが軽症であったとすれば、速やかに診断を確定、軽症のまま終わらねばなりません。この速やかな診断確定、の一助になればと、本文を認めました。

私の場合、発症が七月六日午前十一時前後、七月九日に診断が確定、十日に手術、その後順調に回復し、現在は全くといっていいほど後遺症もなく、普通の生活を送っています。

この病気としては、発症と手術の間が異常に長く、中には、医者の誤診ではないかと疑われる要素もあり、後日のために記しておきます。診断確定・手術が遅れた理由は以下のように考えられます。

・くも膜下出血の典型的な症状である、異常な頭痛と嘔吐が軽かった。意識の混濁はなかった、つまり、全体として軽症であった。このため、診断確定までに

時間を要した。

- ・本人は記憶が全くなくなっており、したがって正常な判断能力もなかったと推定されるが、異常な行動はなく、他人は異常を認識できなかった。
- ・出先での発症で、周囲に異常を察知できる知人がいなかった。
- ・本人は意識は正常さを失っており、異常(病気を認識できなかった)。

一 出来事背景

私には、亡き妻の母の妹である叔母がいる。二〇一一年現在、九十五歳になり、少し認知症気味であるが、一人で真鶴(神奈川県西部、東海道線二駅西は静岡県(熱海)に住んでいる。

基本的に一人で生活できるが、何分高齢である。係累が少なく、過去の経緯から、妻の従妹ともども、時々様子を見に行く。

特に夏は、庭に夏草が生い茂るので、除草がてらに様子見に行くのが慣例になっている。その矢先でのくも膜下出血発症であった。

二 経過

ここに、発症から診断確定・入院までの経過を時間に沿って記す。発症したと推定している二〇一〇年七月六日(火)の正午頃から十三日までの記憶が私には全くない。記憶が回復するのは、十四日以降である。

したがって、ここに記すのは、妻からの聞き取り、買物や医病院の領収書等の資料に基づく推定である。

当初の予定は、妻が大阪に仕事で出張、その間に私は真鶴を訪問、であった。真鶴での作業時間を稼ぐために、前日に妻の実家がある平塚に宿泊、訪問日は早朝からの真鶴訪問が定例で、当日もそのようなスケジュールになっていた。

七月五日(月) 妻と二人で平塚へ、平塚泊。

七月六日(火) 平塚発。私・・・真鶴へ、真鶴泊。 妻・・・大阪へ、大阪泊。

午前中の遅い時刻(午後)の早い時刻に発症したものと推定される。この頃からの記憶がなくなる。その辺に嘔吐を繰り返す甥に、叔母は大分閉口したらしい。結局、追いつ返されることになる。

七月七日(水)

(この日、どのようにして食事をしたかを含めて、状態を推定させるものが何もない。真鶴で一日中「コロコロ」していたと推定。真鶴泊)

七月八日(木)

昼頃、妻から電話。

私「吐いた。気分がわるい。」「コロコロしている」

妻「病院に行ったの?」

私「叔母が外出しており、鍵がなく出られない」

(注・・・叔母の外出は、テイサービスで、町のセンターで一日を過ごす)

妻「すぐに帰宅する」

私「叔母が帰宅次第、私も帰る」

妻の感想・・・電話では、体調不良は感じられたが、会話は全く正常であった。

十七時頃真鶴発、帰宅。真鶴から五井までの電車の利用(乗下車、乗換え)、往きを買ったJRの往復切符を忘れず使用していること、五井駅から自宅までのタクシートの領収書ももらっており、行動に全く異常はない。

二十二時ごろ、妻帰宅。私は二階(寝室)に寝ていた。

私「私も三十分くらい前に帰ったばかり」

七月九日(金)

朝起きぬけに近くの医院(かかりつけ医、九時診療開始)へ。

私「とにかく病院へ行ってくる」熱中症と診断され、対応する治療を受ける。

帰宅後、多くはないが普通の量の朝食を摂る。

私「こうして食事を作ってくれる人がいるのはありがたいな。調子悪いので二階で寝ている」

昼前になると降りてきて、

私「やっぱり気分悪い」といいながらその辺でコロコロしていた。

朝食が用意されたが、今度は食欲もなく、ちょっと箸をつけただけ。この頃から、妻は熱中症にはおかししい、と思い初めたらしい。頭痛から、ふたつ、くも膜下出血が頭をよぎり、医院に電話。

ちょうど昼食の休診時間中で、運よく医者が見つかる。

妻「全く軽快しない。まさか、くも膜下出血ではないでしょうね。

日頃は頭痛を全く訴えない人ですが」

医者「紹介状を用意するのですぐにいらっしゃい」

以上が昼過ぎのやり取りで、××脳神経外科に行くことになる。

私「車を運転して行くの? づらいな」

妻「タクシーを呼びましょうよ」

妻の感想・・・多少つらそうではあったが、全く運転できない様子ではなかった。呼んだタクシーにも人の援けをかりずに自力で乗り込んだ。

十四時頃、××脳神経外科に到着。待合室のベンチで横になっている。

私「このまま入院かな、いやだな」

問診(他人や自分の鼻先を人差し指で指し示す等の動作テスト)の結果は、特段の異常はない。

医者「このまま様子を見ましようか」

妻「この人は全く頭痛を訴えることのない人です」

医者「では、CTを取ってみますか」

その結果は、

医者「すぐ、労災病院へ行ってください。先方には連絡してあります。

救急車も呼びました」

労災病院では、脳外科部長の小澤医師が担当、すぐにMRI、CT等の画像診断を実施。くも膜下出血の診断、手術も実施したい旨の説明があった。

事情を息子に電話、息子も病院に来ることになった。

息子の到着を待って、正式な説明を受ける。二十一時頃。

医者「今から手術すると、午前三時頃に山場をむかえるが、その頃医者は疲労困憊しております。手術は明日にしましょう」

妻・・・私(患者)の症状はさほど重篤には見えなかったため、手術は明日の方がいいだろうと考え、了承した。

手術を明日に延ばすために血圧を下げる、体温を下げる、鎮痛等、生体の活性度を下げる処置を実施、薄暗い刺激の少ない病室に収容。

手術をするに際しての承諾書等、各種の書類に、二人でサイン、手術の準備をすべて完了。

妻と息子は帰宅。

七月十日(土) 十時頃、妻と息子は労災病院に到着。嫁も病院で合流。

十一時頃、手術室に入る。

翌朝二時ごろ、手術室から出てくる。

三. 教訓

以上のごとく、危つく熱中症のまま時間が経過し、二回目の出血に見舞われたら一巻の終わりになりかねないところであった。このような事態に陥らないため、本事例から、学ぶべきことをまとめた。

(一) 医者も間違えることがある、と認識し、自分が考えていることを正直に話す。

最近では、医師も異常に権威主義的な態度を取ることがなく、患者からの意見を素直に、まじめに聴いてもらえることが多い。

医師から、セカンド・オピニオンを訊いてくるようにと、紹介状を書いてくれる場合もある。

(二) 事態の認識の最も根本的なところは、平常と病気と思われる現状との差異である。最も平常をよく理解しているのは、自分自身か、近くに居る家族であるから、現在の異常さを理解できるのも自分か家族である。自分の異常さをよく説明すること。

本例では、「全く頭痛を訴えたことがない患者の日常」に比し、現在が「相当異常」とこの家族の認識がその後の展開の始点になっている。

(三) 病気といっても重篤でない病気が、適切な治療が施されれば、そう長時間を要することなく快方に向かう。もし軽快しない場合は、病気が深刻であるか、治療が的を得ていない、と認識する。医師に診断・治療を受けた場合、必ず

次の質問をして、次回の通院時期を決める。

「先生、もしこの治療(薬)が有効だとしたら、その効き目が表れるのに何日くらいかかりますか」

「そうだな、二日くらいかな」

「では、二日経っても効き目が現れない時にはその時来ます」

最近の投薬は、慢性病の治療の場合を除き、七日間が多い。何かおかしいと思ったら、薬が切れなくても自然な形で病院に行く口実を作っておくことは必要。

本例では「熱中症の診断と治療」にかかわらず、全く軽快しないので、診断と治療に疑問を持ったことが医師に電話する契機になっている。

(四) 我々位の年齢になると、できるだけひとりにならない。周囲に家族等、自分の日常を熟知している人がいるようにすべきだ。他人には異常が分からなくても、本人か家族には異常と分かる場合がある。これで生死が別れる場合もある。

八期通信アーカイブス

2008年 第14号
荒木 藍子(5組)



満三歳三ヶ月、昔は正月に歳をとるので、五歳になったばかりの事、奉天で父に連れられて、母の病室に入った時の事。二月の寒い日、鉄製のベッドに寝ている母の枕元で、父が白い布をとって、その父の眼から大きな涙がポロポロポロッと落ち(本当に大きかった)私一人を置いて、部屋を出ていきました。

私は、眠っている母を起そうとベッドの足元から足をくすぐったり、頭を撫でたり…。それが母の死である事の意味もわからない、その状況だけを絵のように憶えています。

まだ歩けない頃、お座りはしていたと思います。窓から父が馬に乗っているのが見えたと思ったら、何か騒々しく「ミソがどうこう」と騒いでいたのも憶えています。それが後年、誰が話していた事なのか、言葉もわからない苦の赤ん坊が憶えているものなのか、変に思われそうでした話した事ありませんでした。

四年程前、五歳上の兄にその事を云ってみたら、不思議そうにその時の状況を話してくれました。お味噌の樽を追分荷物のように、馬に提げて帰ってきたら、パッカパッカと揺れて、飛び散って大変だったんだとの事。ああ、本当の事だったんだと納得したのです。

母の記憶はあまりないけど、母が生きていた頃の事だから、三歳以前の事になるのですが、人の記憶がどこまでどういう状態で残るのか、ちょっと興味があります。落語家の立川談志さんが「俺は産まれる時の産道の記憶がある」と云っていたのも有りかな?と思えます。